

## 川島大輔、近藤恵編著

## 『はじめての死生心理学—現代社会において、死とともに生きる』

(新曜社、2016年)

糸 和彦

本書のタイトル「はじめての死生心理学」は二つの意味をあらわす。まず、日本で初めて「死生心理学」という言葉を題名に入れた本であること。次に、この分野を初学者でも学べるように、基礎的事項の解説から始めていることである。また、心理学といっても、死にゆく人の心理のみを狭く取り上げた本ではない。ここで心理学は、心身二元論でいうところの、体ではないもの全てを心と考え、死に関する身体的問題以外の全てを扱うもので、広範な事項を取り上げて網羅的である。また、本書は二つの意味で実践的である。まず、編者・著者の多くが、実際に死に瀕する方と日常的に接していることから、介入者の視点で書かれた部分が多く、理論より実践・経験に基づく記載になっており、実臨床現場で役立つという内容面の実践性である。次に、全ての章に「ワーク」が設けられ、書き込みする行為により、読者自身も実践を迫られる点である。そのため、本書は、マーカーや付箋ではなく、ペンを持って読む必要がある。そこで、この本は、読者自身にも、死という重大な課題に対して深刻な変化をもたらす可能性があり、序章のワークには「心の準備体操」という読者自身の安全を期するためのワークがあることが印象的である。これは編著者の川島が執筆した、自死で心理的なダメージを受けた人に対するワークブックにもあるもので、生命や生きる意味について軽々しく語るべきではないという配慮に基づくと思われる。

内容は、3部に分かれ、第1部「死を見つめる」は、総論的に死生に関するこれまでの研究が4つの項目にまとめて紹介されている。まず、死を社会一般、当事者、周囲の者などの異なる視点から見た時の、死に対する態度・死に至る過程・死による悲嘆と回復についての研究が概観されている。この分野の本としては最初に一般社会にも広まったキューブラー・ロスの「死の瞬間」の頃の歴

史から始めて、予期悲嘆、レジリエンス、外傷後成長などの新しい概念まで、広い範囲の研究が概観されている。さらに「自殺」が独立した項目として取り上げられていて、4章のワーク「自殺予防クイズ」は知識の確認になる。

第2部「死と向き合う」は、各論的に年代ごとに分かれた6章からなり、周産期から乳児期、幼児期から児童期、青年期、成人期、中年期、老年期という、人生の6個の時期の死生の特徴について詳述する。例えば、子どもであれば、子ども自身が死に瀕する場合の子ども自身とその家族という状況、逆に、子どもが家族などの死に瀕する状況もあり、子どもという特徴に応じて対応すべき状況だけでもいろいろある。そして、大人の死に対する反応はある程度予想できるが、子どもの反応は知識がなければ予想できないものもある。このような多様な状況を取り上げた第2部は、本書の特徴であり主幹をなし、各項目とも読み応えがある。周産期から幼児期の死は、家族とそれを支える周囲の視点から語られるが、出生前診断など生死の概念を揺るがす倫理的課題も多い。児童期から思春期にかけての項では、死の体験が死の概念の発達に大きな影響を与えることが興味深い。若年者では自死が主要な死因になるが、生死の観念の発達にも学ぶべき点が多い。老年期や終末期の死は、従来から多くの研究があるが、青年～成人～中年を3項目に分けるのは目新しい。読み進めると、死のインパクトは年代の微妙な差により大きく異なり、一般に若年者の方が死の不安が強いことや、評者のように50歳を超えて人生の後半に入った後の死のとらえ方が変化することなど、なるほどと納得させられた。

第3部「死を探求する」は、研究方法について研究倫理から始めて、量的研究・質的研究に分けて方法論を取り上げている。死生学に限らない一般論もあり、一般の読者には不要な内容も多いが、この章があるため研究者のための教科書としても使用できるものとなっている。評者はこの分野の専門ではないが、わかりやすく、実践的で役に立つ優れた教科書と思う。